

【原文】

今天地開闢，淳風稍遠，皇平氣隱，灾厲橫流。上皇之後，三五以來，兵疫水火，更互競興，皆由億兆心邪形偽，破壞五德，爭任六情，肆兇逞暴，更相侵凌，尊卑長少，貴賤亂離，致二儀失序，七曜違經，三才變異。妖訛紛綸，神鬼交傷，人物凋喪，眚禍荐至，不悟不悛，萬毒恣行，不可勝數。

【訓読】

今、天地開闢より、淳風稍や遠く、皇平の氣は隠れ、灾厲横流す。上皇の後、三五より以來、兵・疫・水・火、更ごも互いに競い興るは、皆な億兆の心邪にして形偽り、五徳を破壊し、争いて六情に任せ、肆兇逞暴し、更ごも相い侵凌し、尊卑長少、貴賤亂離するに由り、二儀序を失い、七曜經に違ひ、三才變異するを致し、妖訛紛綸し、神鬼交ごも傷ない、人物凋喪し、眚禍荐（しば）しば至り、悟らず悛（あらた）めず、萬毒恣に行わるること、勝げて數うべからず。

【訳】

天地が開闢してから（時代は遷り）、敦厚な風氣は遠い昔のものとなり、皇平の氣は隠れ、災害や疫病が横行した。上皇の時代の後、三皇五帝以降の時代に、戦争・疫病・水害・旱魃が、それぞれ競うように興ったのは、人民の心が邪（よこしま）で肉体を傷つけ、五徳を破壊し、（喜・怒・哀・楽・愛・悪の）六情のおもむくままにまかせ、凶悪暴虐を尽くし、互いに侵犯し、尊卑・長幼・貴賤の分が乱れたことによる。これにより、陰陽の二儀は秩序を失い、七つの星（日・月・歳星・熒惑・填星・太白・辰星）は常ならざる運行をし、天・地・人の三才は異変を来たし、虚妄怪誕が入り乱れ、神や鬼は人間を傷つけ、人々は亡くなり、災禍は頻繁に発生したが、（人民はその状況と原因を）悟らず反省しないので、あらゆる害毒が流行し、それらは列挙しきれないほどである。

【注】

○今天地開闢，淳風稍遠，皇平氣隱，灾厲橫流

神塚淑子『『太平經』の承負と太平の理論について』（初出は『名古屋大学教養部紀要A（人文・社会科学）』32号、1988年。のち『六朝道教思想の研究』、創文社、1999年、301-337頁に収録）「承負の説は、『太平經』の理論体系の中で重要な位置を占めている。……後の世代の人が前の世代の人の犯した罪を「承」け、前の世代の人が後の世代の人に災禍を「負」わせて、時代（世代）の前後を通じてつぎつぎと伝えられていく罪責の連鎖が、『太平經』の言う承負である。この承負は個人のレベルで言われることもあれば、社会全体のレベルで言われることもある。」（309頁）「とりわけ注目すべきは、この承負はしばしば「天地開闢以来」のものとして記述されている点である。「其の承負せる天地開闢以来の流災委毒の謫」（卷四一。『合校』八

六頁)とか「天地開闢已來の帝王人民の承負」(卷三七)、『合校』五四頁)「天地開闢已來の承負の謫」(卷九一)、『合校』三六一頁)といった表現が示しているように、過去の歴史において承負の連鎖は一度も断ち切られることなく綿々と連なって現在に至っているとされているのである。しかも、それは時代を追って累乗的に加算され、そのために、その具体的なあらわれである政情不安やさまざまの災厄は、その激しさと深刻さを増しているのである。」(311頁)

○天地開闢

『論衡』論死「天地開闢，人皇以來，隨壽而死，若中年夭亡，以億萬數。」

○淳風稍遠

『魏書』卷八六・孝感傳「經云，孝，德之本，孝悌之至，通於神明。此蓋生人之大者。淳風既遠，世情雖薄，孔門有以責衣錦，詩人所以思素冠。」(1881)

『抱朴子』外篇・逸民「淳風足以濯百代之穢，高操足以激將來之濁。」

○皇平氣隱

『太平經』卷四八「願復聞皇爲字者。一日而王，日上二者，天也。天者數一，天得日，昭然大明則王，故爲字一與日王并合，成皇字也。一爲天，天亦君長也，日亦君長也，王亦君長也。三君長相得成字，名爲皇。皇者，乃言其神盛煌煌，故名爲皇也。皇天下第一無復能上者也。善哉善哉，師幸哀開以皇字，願聞其太平氣之字。太者，大也。迺言其積大行如天，凡事大也，無復大於天者也。平者，乃言其治太平均，凡事悉理，無復姦私也。平者，比若地居下，主執平也，地之執平也。比若人種善得善，種惡得惡，人與之善用力，多其物。子好善，人與之鮮，鮮其物惡也。氣者，乃言天氣悅喜下生，地氣順喜上養。氣之法行於天下地上，陰陽相得，交而爲和，與中和氣三合，共養凡物，三氣相愛相通，無復有害者。太者大也，平者正也，氣者主養以通和也。得此以治，太平而和，且大正也。故言太平氣至也。」(147~148)

『太平經鈔』庚部卷七「故理欲疾平者，務斷分爭，刑罰倡樂爲先，皇平之氣立至矣。」

○灾厲橫流

『中論』曆數「於是陰陽調和，灾厲不作。」

『孟子』滕文公上「當堯之時，天下猶未平，洪水橫流，汜濫於天下，草木暢茂，禽獸繁殖，五穀不登，禽獸逼人，獸蹄鳥迹之道交於中國。」

『文選』卷一九・謝靈運「述祖德詩」「中原昔喪亂，喪亂豈解已。…萬邦咸震懼，橫流賴君子。」
李善注「懼，懼也。謝靈運「山居賦」自注曰：「余祖車騎建大功，淮、肥左右，得免橫流之禍。」」

『無上秘要』卷九九・昇太清品「大百六度厄寶命長存符」(右出『洞真青要紫書經』)「黃書白絹，佩之左肘，千妖萬精，疫癘橫流，災所不傷，保身長命，壽同天地。佩之九年，白日飛昇太清。」

○上皇之後，三五以來

神塚前掲論文(頁数は前掲書)『太平經』においては遠い過去の時代に理想の世が存在していたという考え方が顕著に見られる。宇宙と人間とを通貫して完全な理想の状態が現出していたその遠い過去の世のことを、『太平經』では単に「古」と呼ぶこともあれば、「上古」「太古」「上皇之時」という呼び方をすることもあり、また、五帝・三王・五霸の世に対して「三皇」の世とすることもある。天地開闢の時点からあまり遠くは隔たらないと意識されていたこの過去の時間(以下の文では便宜上「上古」と称することに)こそ、『太平經』が想定する理想の世のモデルなのである。」(303頁)「人間の最大の幸福を天地万物との融合の中

に見出し、人類の歴史の始源の時点にそうした理想が達成されていたと考える。こうした道家の見方が、以後の人類の歴史を下降と衰退の流れとして捉えたのと同じように、『太平経』においても、歴史の経過はとりもなおさず下降と衰退の過程であったと考えている。『太平経』では歴史の時代区分として、「上古」「中古」「下古」の三分法と、「三皇」「五帝」「三王」「五霸」の四分法がしばしば用いられる。そして、理想の実現されていた「上古」「三皇」の時代から、時を経てしだいに世は衰退し、今の「下古」「五霸」の世に至っていると認識している。(注15)『太平経』の中では「三皇」は「五帝」以下に対して理想の世とされるのが普通であるが、ごく例外的に、「三皇」を「上皇」「中皇」「下皇」の三つに分けて、その中でやはり下降の過程があったとする記述もある。……三皇↓五帝↓三王↓五霸という歴史の過程は「真道」の喪失の過程であり、時代とともに君主の寿命は短くなったというわけである。……総じて言えば、三皇の世は「道」による教化がおこなわれていたが、五帝の世は「徳」による教化、三王の世は「文」による教化、五霸の世は「武」による教化という具合に、しだいに墮落していったとされるのである。」(307～308頁)

○兵疫水火

孟安排『道教義樞』卷九・五濁義「義曰：五濁者、時代下衰、衆生多惱、亦澆浮之事、明塵累之由、欲令出三界之樊籠、入一源之妙域、此其致也。釋曰：一、煩惱濁者、謂是通欲、惱累行人、故名爲惱。二、見濁者、謂是別欲、分別取著、故名爲見。三、命濁者、語其短促色心連持、故名爲命。四、生死濁者、謂是衆生處非一、故名衆生必滅壞。五、時運濁者、明末世澆漓、三災所起、劫命使然、故名時運。經云：憐愍將來、劫運多惱、水火兵災、種種疾病。……又三災義者、兵、病、水火也。『本際經』云：兵戈水火、毒疫災害、若陽九、百六小劫之會、有此三災。又云：以刀兵爲劫、以大病爲劫、以水火爲劫、此則三災所起、三小劫末也。又云：一小劫末、具此三災。經戒云：水火之災者、此兵病萬姓、水火蕩汰。然陽九、百六。又有大小。陸先生云：四百五十六歲爲陽九、而十陽九、四千五百六十歲爲一元、有此三災也。三百六十歲爲百六、亦有此災。此小陽九、百六也。若四萬五千六百歲爲陽九元、三千六百歲爲百六周。此大陽九、百六也。『天地運度經』云：三千三百年爲小陽九、小百六、九萬九千九百年爲大陽九、大百六。天庀謂之陽九、地庀謂之百六也。」

○億兆心邪形僞

『尚書』泰誓中「受有億兆夷人、離心離徳。(孔傳：平人、凡人也。雖多而執心用徳不同。予有亂臣十人、同心同徳。(我治理之。臣雖少而心徳同。)」(155上)『太平経鈔』己部卷六「下古人心邪蔽、不若太上古之三皇、人心質朴、心意專一、各樂稱天心、而忠信不欺其上、故可無文也。」

○破壊五徳

「五徳」が指すものには、いくつかの意味がある。

『文選』卷四八・班固「典引」「肇命民主、五徳初始。」李善注「民主者、天子也。……五徳、五行之徳。自伏羲已下、帝王相代、各據其一行、始於木、終於水、則復始也。」

『論語』學而「子貢曰、夫子溫、良、恭、儉、讓以得之。夫子之求之也、其諸異乎人之求之與。」集解「鄭曰：言夫子行此五徳而得之、與人求之異、明人君自與之。」

○爭任六情

『白虎通』性情「六情者何謂也。喜、怒、哀、樂、愛、惡、謂六情、所以扶成五性。性所以五、情所以六者何。人本含六律五行氣而生、故内有五藏六府、此情性之所由出入也。」(疏證

『雲笈七籤』卷十・老君太上虛無自然本起經「六情者，謂形識知痛癢，欲得細滑。耳聞聲，心樂之；目見色，心欲之；鼻聞香，心逐臭；口得味，心便喜；身得細滑衣被，心便利之；得所愛，心便悅之。坐此六情以喪，故復名六情喪人。」(178)

※道教的「六情」(眼・耳・鼻・口・身・心)は、仏教の「六根」(眼・耳・鼻・舌・身・意)に相当。

○肆兇逞暴

『晉書』列傳第三七・溫嶠傳「逆賊肆凶，陵蹈宗廟，火延宮掖，矢流太極，二御幽逼，宰相困迫，殘虐朝士，劫辱子女。」(179)

『晉書』列傳第六七・四夷傳論「既而沸脣成俗，鳴鏑爲羣，振鴉響而挺災，恣狼心而逞暴。」(2551)

○更相侵凌

『墨子』天志下「今天下之諸侯，將猶皆侵凌攻伐兼并此，爲殺一不辜人者，數千萬矣。」

○尊卑長少，貴賤亂離

『詩』小雅・四月「秋日淒淒，百卉具腓。(傳：淒淒，涼風也。卉，草也。腓，病也。箋云：具，猶皆也。涼風用事而衆草皆病，興貪殘之政行而萬民困病。)亂離瘼矣，爰其適歸。(離，憂。瘼，病。適，之也。箋云，爰，日也。今政亂，國將有憂病者矣。曰此禍其所之歸乎，言憂病之禍，必自之歸爲亂。)(442下)

○二儀失序

『晉書』卷二三・樂志下「及武帝受禪，乃令傅玄製爲二十二篇，亦述以功德代魏。……改上之回爲宣輔政，言宣帝聖道深遠，撥亂反正，網羅文武之才，以定二儀之序也。」(702)

陳武帝「哀策文」(『藝文類聚』卷一四)「翠龜負字，赤雀銜書。謳歌適夏，禮樂遷虞。負辰正位，升壇受圖。二儀協序，五緯同符。門歌麟趾，室詠騶虞。」(272~273)

『周易』繫辭上「是故易有太極，是生兩儀，兩儀生四象，四象生八卦，八卦定吉凶，吉凶生大業。」

○七曜違經

『穀梁傳』范寧序「是以妖災因釁而作，民俗染化而遷，陰陽爲之愆度，七耀爲之盈縮，川岳爲之崩竭，鬼神爲之疵厲。」楊士勛疏「謂之七曜者，日月五星，皆照天下，故謂之七曜。五星者，即東方歲星，南方熒惑，西方太白，北方辰星，中央鎮星是也。」

『通志』卷二九・天文略・七曜「日，循黃道東行，一日一夜行一度，二百六十五日有奇而周天。……月者太陰之精也。……歲星曰東方、春、木，於人五常仁也，五事貌也。……熒惑曰南方、夏、火、禮也。……填星曰中央、季夏、土、信也、思心也。……太白曰西方、秋、金、義也、言也。……辰星曰北方、冬、水、智也、聽也。」

『宋書』卷六九・劉湛傳「比年七曜違度，震蝕表災，侵陽之徵，事符幽顯。」(1817)

○妖訛紛綸

『抱朴子』明本「是以真人徐徐於民間，不促促於登遐耳。末俗偷薄，雕僞彌深，玄淡之化廢，而邪俗之黨繁，既不信道，好爲訛毀，謂真正爲妖訛，以神仙爲誕妄。」

『史記』卷一一七・司馬相如傳「伊上古之初肇，自昊穹兮生民，歷撰列辟，以迄于秦。率邇者踵武，逖聽者風聲。紛綸葳蕤，堙滅而不稱者，不可勝數也。」(3064~3065)

○神鬼交傷

『老子』第六〇章・河上公注「治大國若烹小鮮。以道蒞天下，其鬼不神。(以道德居位治天下，

則鬼不敢見其精神以犯人也。) 非其鬼不神，其神不傷人。(其鬼非無精神，邪不入正，不能傷自然之人。) 非其神不傷人，聖人亦不傷人。(非鬼神不能傷害人。以聖人在位，不傷害人，故鬼不敢干之也。) 夫兩不相傷，(鬼與聖人俱兩不相傷也。) 故德交歸焉。(夫兩不相傷，人得治於陽，鬼得治於陰，人得全其性命，鬼得保其精神，故德交歸焉。)(235～236)

王弼注「治大國若烹小鮮。以道莅天下，其鬼不神。(治大國則若烹小鮮，以道莅天下，則其鬼不神也。) 非其鬼不神，其神不傷人。(神不害自然也。物守自然，則神無所加。神無所加，則不知神之爲神也。) 非其神不傷人，聖人亦不傷人。(道治則神不傷人，神不傷人則不知神之爲神。道治則聖人亦不傷人，聖人亦不傷人，則不知聖人之爲聖也。猶云不知神之爲神，亦不知聖人之爲聖也。夫恃威綱以使物者，治之衰也。使不知神聖之爲神聖，道之極也。) 夫兩不相傷，故德交歸焉。(神不傷人，聖人亦不傷人。聖人不傷人，神亦不傷人。故兩不相傷也。神聖合道，交歸之也。)(校釋 157～158)

○人物凋喪

『宋書』卷九五・索虜傳論「元康以後，風雅雕喪，五胡遞襲，翦覆諸華。」(2358)

『周書』卷二三・蘇綽傳「然世道彫喪，已數百年。大亂滋甚，且二十歲。」(384)

○皆禍荐至

『史記』卷二六・曆書「少皞氏之衰也，九黎亂德，民神雜擾，不可放物，禍菑薦至，莫盡其氣。」(1257)

○不悟不悛

『魏書』卷九九・沮渠蒙遜傳「若親率羣臣，委贄郊迎，謁拜馬首，上策也；六軍既臨，面縛輿櫬，又其次也。如其守迷窮城，不時悛悟，身死族滅，爲世大戮。宜思厥中，自求多福也。」

【原文】

大惡有四，兵、病、水、火。陽九一周，陰孤盛則水溢；百六一帀，陽偏興則火起。自堯以前，不復須述，從唐以後，今略陳之，宜諦憶識，急營防避。堯水之後，湯火爲災，此後偏地小小水火，罪重隨招，非大陽九、大百六也。大九六中，必有大小甲申，甲申爲期，鬼對人也。災有重輕，罪福厚薄，年地既異，推移不同。中人之中，依期自至，中之上下，可上可下，上下進退，升降無定。爲惡則促，爲善則延。未能精進，不能得道。正可申期，隨功多少。是以百六陽九，或先或後，常數大曆，准擬淺深。

【訓読】

大惡に四あり、兵・病・水・火なり。陽九一たび周(めぐ)り、陰孤り盛んなれば則ち水溢れ、百六一たび帀(めぐ)り、陽偏えに興らば則ち火起こる。堯自り以前は、復たび述ぶるを須(もち)いず、唐従り以後、今略(およ)そ之を陳ぶ、宜しく諦かに憶識し、急ぎ防避を營むべし。堯水の後、湯火災を爲し、此の後、偏地に小小の水火あり、罪重に隨招するも、大陽九・大百六には非ざるなり。大九六中に、必ず大小の甲申あり、甲申を期と爲し、鬼人に對するなり。災に重輕有り、罪福に厚薄あり、年地既に異なり、推移するは同じからず。中人の中は、期に依りて自ら至り、中の上下、上るべく下るべく、上下進退し、升降するに定めなし。惡を爲さば則ち促(みじか)く、善を爲さば則ち延ぶ。未だ能く精進せ

ざれば、道を得ること能わず。正に期を申ばすべきも、功の多少に隨う。是こを以て百六・陽九、或いは先んじ或は後にし、常數大曆、淺深を准擬す。

【訳】

大きな災厄には四つあり、戦争・疫病・水害・旱魃である。陽九（陽災）が一回りすると、陰気だけが盛んになり水が溢れ出し、百六（陰災）が一回りすると、陽気だけが興り火が起る。堯より以前の（太古の平和な時代の）ことは述べる必要もないが、陶唐氏（堯）以後の歴史を簡略に述べるので、はっきりと記憶しておいて、急いで（災厄を）防ぎ避けよ。堯が水害に苦しんだ後、商湯では旱魃が災いをなしたが、この後、あらゆる場所で小さな水害・旱魃が起ったり、それらは重い罪を犯したことに依ったが、これらは大陽九・大百六ではなかった。大陽九・大百六の場合は、必ず大小の甲申があり、甲申の歳をサイクルとして、鬼が人に災いを為すのである。災厄には軽重があり、罪や福にも程度の差があり、その起る年や場所が異なれば、その移り変わりも一樣ではない。中人のなかの中庸の者は、甲申の歳が来れば現れる。中人のうち上や下の者は、上に行ったり下に行ったりして、上下・進退・昇降には定まりがない。悪行を行えば（災厄をもたらす甲申がやってくる）サイクルは縮まり、善行を行えば（災厄をもたらす甲申がやってくる）サイクルは延びる。精進しなければ道を得ることはできない。（大陽九・大百六の来る甲申の）時期を延ばすことはできるが、それは修行の如何にかかっている。それゆえ、（ある人に）百六・陽九（がやって来る時期）は時間的に前後したりするし、不変の法則や大きな曆のサイクルによって、（ある人が遭遇する）災厄の深淺は決められるのである。

【注】

○大惡有四、兵、病、水、火

前掲「兵疫水火」の注、参照。

○陽九一周、陰孤盛則水溢；百六一市、陽偏興則火起

「陽九」「百六」は、金志玟先生レジюме（二〇一四年五月二十四日）二頁の注、参照。

『漢書』律曆上『易九疋』曰：初入元，百六，陽九；次三百七十四，陰九；次四百八十，陽九（孟康曰：「易傳也。所謂陽九之疋，百六之會者也。初入元百六歲有疋者，則前元之餘氣也，若餘分為閏也。易爻有九六七八，百六與三百七十四，六乘人之數也，六八四十八，合為四百八十歲也。」）；次七百二十，陰七；次七百二十，陽七；次六百，陰五；次六百，陽五；次四百八十，陰三；次四百八十，陽三。凡四千六百一十七歲，與一元終。經歲四千五百六十，災歲五十七。」（984）

※4617年より一元。4617＝常歲4560年＋災歲57年。1元の間に、陽厄が33年、陰厄が24年、併せて57年。陽厄は旱災、陰厄は水災。

106＋9（陽九）＋374＋9（陰九）＋480＋9（陽九）＋720＋7（陰七）＋720＋7（陽七）＋600＋5（陰五）＋600＋5（陽五）＋480＋3（陰三）＋480＋3（陽三）＝4617

ただし、『太平經鈔』では、「陽九」を陽災、「百六」を陰災と考えている。

『雲笈七籤』卷二・混元洞開關劫運部・劫運「又『靈寶天地運度經』云：靈寶自然運度，有大陽九、大百六也，小陽九、小百六也。三千三百年爲小陽九、小百六也，九千九百年爲大

陽九、大百六也。夫天厯謂之陽九也；地虧謂之百六也。至金天氏之後，甲申之歲，是其天地運度否泰所終，陽九、百六會。至時，道德方明，兇醜頓肆〔除〕，聖君受任於壬辰之年也。」

(24)

前掲の『道教義樞』卷十「五濁義」も参照。

※『太平経』における災厄観―災異思想的災厄観と天文曆法的災厄観―

神塚前掲論文「このように『太平経』の承負の説は漢代の災異思想と密接なつながりを持っているのである。……ところで、漢代において災厄のことを説くものとして、災異思想の他に陽九百六の説があった。これは、災異思想が政治的であるのに対して、自然界の陰陽二気の周期的な運動に注目した天文曆法的発想と関連するものである。これは『太平経』の承負の説とどのような関係にあるのだろうか。……『太平経』においては、災厄の原因についての二とおりの考え方、すなわち、災厄は人間としての悪しき行為の結果として起るのか、それとも天体の運行といった自然界の気の周期的なめぐりとして起るのかということが問題にされている。これに関する記述は巻九二（万二千国始気訣）に見える。〔注39「願請問天地開闢以來，人或烈病而死盡，或水而死盡，或兵而死盡。願聞其意，何所犯坐哉。將悉天地之際會邪，承負之厄耶。然，古今之文多説為天地陰陽之會，非也，是皆承負厄也。天氣中和氣怒，神靈戰鬪。烈病而死者，天伐除之。水而死者，地伐除之。兵而死者，人伐除也。』〔合校』三七〇―三七二頁。〕……ここでは、人が死に絶えるほどの大きな三つの災厄―病・水・兵―は、いずれも承負の厄すなわち人が天地中和の気を怒らせる大罪を犯した結果として起るものであり、「天地陰陽の会」ではないということをつて天からの使者である天師が述べている。しかし、天師は天地の際会と人の世の災厄が全く無関係であると考えているわけではない。」(314) 316頁)

○急營防避

『禮記』大學「生財有大道。生之者衆，食之者寡，爲之者疾，用之者舒，則財恆足矣。」疏「生之者衆者，謂爲農桑多也。食之者寡者，謂減省無用之費也。爲之者疾者，謂百姓急營農桑事業也。用之者舒者，謂君上緩於營造費用也。」(991下)

『宋書』卷七三・顏延之傳「哀沒畏遠，忌聞影迹，又蒙蔽其善，毀之無度，心短彼能，私樹己拙，自崇恒輩，罔顧高識，有人至此，實盡大倫。每思防避，無通閭伍。」(1900)

○堯水之後

『尚書』堯典「帝曰，咨四岳（孔傳：四岳，即上羲、和之四子，分掌四岳之諸侯，故稱焉），湯湯洪水方割（湯湯，流貌。洪，大。割，害也。言大水方方為害。湯音傷，洪音戶工反），蕩蕩懷山襄陵，浩浩滔天（蕩蕩，言之奔突有所滌除。懷，包。襄，上也。包山上陵。浩浩，盛大，若漫天。浩，胡老反。滌，大歷反。上，時掌反）。下民其咨。有能俾乂（俾，使。乂，治也。言民咨嗟憂愁，病水困苦，故問四岳，有能治者將使之。俾，必爾反）。兪曰，於鯀哉（兪，皆也。鯀，崇伯之名，朝臣舉之。兪，七廉反，又七劍反。於音烏。鯀，故本反，馬云禹父也。朝，直遙反）。帝曰，吁咈哉，方命圯族（凡言吁者，皆非帝意。咈，戾。圯，毀。族，類也。言鯀性很戾，好此方名。命而行事，輒毀敗善類。咈，扶弗反。忿戾也。方如字，馬云，方，放也，徐云，鄭、王音放。圯音皮美反，戾音力計反）。岳曰，異哉，試可乃已（異，已也，退也。言餘人盡已，唯鯀可試，無成乃退。異徐云鄭音異孔王音怡）。帝曰，往欽哉（勅鯀往治水，命使敬其事。堯知其性很戾圯族，未明其所能，而據衆言可試，故遂用之）。九載績用弗成（載，年也。三考九年，功用不成，則放退之。）」(26下)

『孟子』滕文公上「當堯之時，天下猶未平，洪水橫流，汜濫於天下，草木暢茂，禽獸繁殖，

五穀不登，禽獸逼人，獸蹄鳥迹之道，交於中國。堯獨憂之，舉舜而敷治焉。舜使益掌火，益烈山澤而焚之，禽獸逃匿。禹疏九河，濬濟漯而注諸海，決汝漢，排淮泗，而注之江。然後中國可得而食也。」

○湯火爲災

『呂氏春秋』順民「昔者，湯克夏而正天下，天大旱，五年不收。湯乃以身禱於桑林，曰：「余一人有罪，無及萬夫。萬夫有罪，在余一人。無以一人之不敏，使上帝鬼神傷民之命。」於是翦其髮，磨其手，以身爲犧牲，用祈福於上帝，民乃甚說，雨乃大至。則湯達乎鬼神之化，人事之傳也。」（校釋 479）

○非大陽九、大百六也

「兵疫水火」注の『道教義樞』卷九「五濁義」を参照。

○大九六中，必有大小甲申，甲申爲期，鬼對人也

「甲申」は三統曆の「人統」の始まり。『漢書』律曆上「三代各據一統，明三統常合，而迭爲首，登降三統之首，周還五行之道也。故三五相包而生。天統之正，始施於子半，日萌色赤。地統受之於丑初，日肇化而黃，至丑半，日牙化而白。人統受之於寅初，日孽成而黑，至寅半，日生成而青。天施復於子，地化自丑畢於辰，人生自寅成於申。故曆數三統，天以甲子，地以甲辰，人以甲申。」（984～985）

「大小甲申」については、詳しくは、この後の本書本卷四葉に見える。

○中人之中・中之上下

『太平經抄』戊部卷五「神者皆以規正，其根太相，太相繫於帝王，因以正天行之。其次根繫於皇后，因以順地理。中根繫於衆聖，因以理陰陽。細微小根繫於庶民，因以理萬物。大人爲之得大，中人爲之得中，小人爲之得小，皆可正也。」

吳筠『玄綱論』天稟章第四「夫道本無動靜而陰陽生焉，氣本無清濁而天地形焉。純陽赫赫在乎上，九天之上無陰也。純陰冥冥處乎下，九地之下無陽也。陰陽混蒸而生萬有。生萬有者，正在天地之間矣。故氣象變通，晦明有類。陽以明而正，其粹爲真靈，陰以晦而邪，其精爲魔魅。故稟陽靈生者爲睿哲，資陰魅育者爲頑兇。睿哲惠和，陽好生也。頑兇悖戾，陰好殺也。

或善或否，二氣均合而生中人。三者各有所稟，而教安施乎。教之所施爲中人爾。何者。睿哲不教而自知，頑兇雖教而不移。此皆受陰陽之純氣者也。亦猶火可滅，不能使之寒，冰可消，不能使之熱，理固然矣。夫中人爲善則和氣應，爲不善則害氣集。故積善有餘慶，積惡有餘殃。有慶有殃，教於是立。」

○爲惡則促，爲善則延

『列仙傳』卷上「叩疏」叩疏者，周封史也。能行氣鍊形，煮石體而服之，謂之石鍾乳。至數百年往來入太室山中有卧石牀枕焉。八珍促壽，五石延生。叩疏得之，鍊體餌精。人以百年，行邁身輕。寢息中嶽，遊步仙庭。」

『北齊書』卷四五・房豹傳「豹曰：「夫命也在天，豈人理所能延促。公若實有災眚，恐非禳所能解，若其實無，何禳之有。」（675）

○准擬淺深

『抱朴子』外篇・疾謬「其有才思者，爲人也，猶善於依因機會，准擬體例，引古喻今，言微理舉，雅而可笑，中而不傷，不損人之所諱，不犯人之所惜。」

元稹「董逃行」（『元氏長慶集』卷二二）「董逃董逃董卓逃。……董逃董逃人莫喜。勝負相環相

枕倚。縫綴難成裁破易。何況曲針不能伸巧指。欲學裁縫須準擬。」